

3月25日正午必着

明石春浦先生書

舟窓過月虛  
 船窓過月虛  
 日欲供調膳  
 日欲供調膳  
 北固暝鐘初  
 北固暝鐘初  
 石頭城下泊  
 石頭城下泊  
 吳山侵越衆  
 吳山侵越衆

せきとうじょうかのやどり  
ごさんえつをおかしておおく  
吳山侵越衆

ほくこめいしよのはじめ  
すいりうとういりてそら  
隋柳入唐疎

ていろしおをつきてたち  
ひにちようせんをきよせんとはつするも  
日欲供調膳

せんそつきをよきりてむなし  
へきしまたるはいすれのふのしよせ  
辟來何府書

(賈島)

明石幸子書

離家三四月  
 離家三四月  
 落涙百千行  
 落涙百千行  
 時事皆如夢  
 時事皆如夢  
 時時仰彼蒼  
 時時仰彼蒼

いえをはなれてさんしげつ  
ばんじみなゆめのことし  
萬事皆如夢

なみたなとすひやくせんごう  
とよときひそうをあおぐ  
時時仰彼蒼

(菅原道真)

離家は京都の家を離れ、太宰の権帥に左遷されたこと。彼蒼は天のこと。詩経に「彼蒼者天」とあるのに本づく。蒼天。

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

花鳥装春

(程嘉燧)

花鳥春を装う

花さき鳥がないて春景色をかざる。

梅花落處疑殘雪  
柳葉開時任好風

(杜審言)

梅花落つる處殘雪かと疑い  
柳葉開く時好風に任す

梅花の散ったあたりは消え残れる雪かと疑うほど白く、  
柳葉はそよ風に伸びなびいている。

冬日野望

(于良史)

冬日の野望

于良史

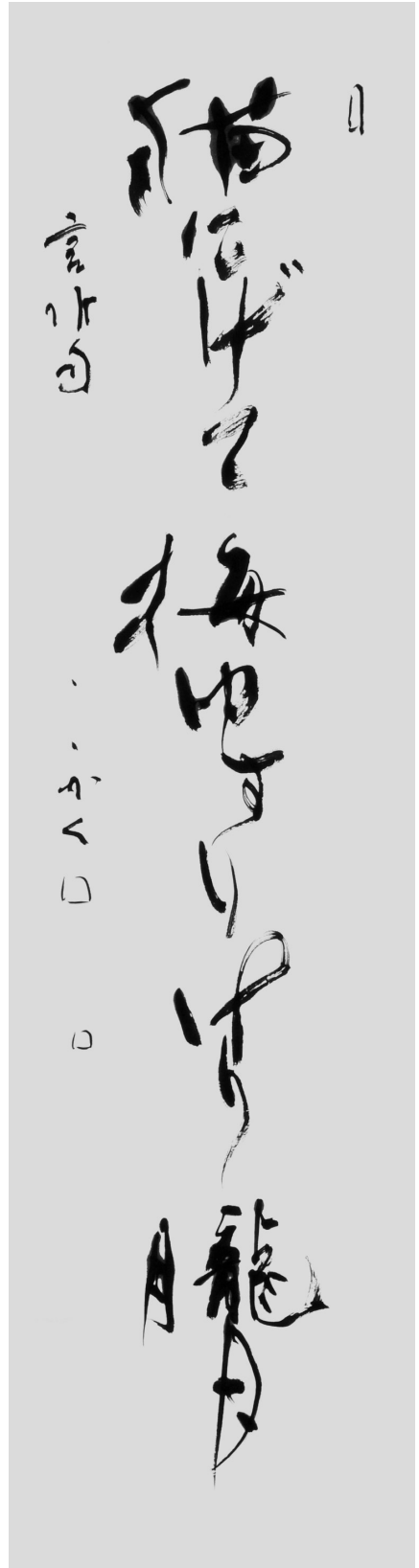
地際朝陽滿 天邊宿霧收  
風兼殘雪起 河帶斷冰流  
北闕馳心極 南圖尚旅游  
登臨思不已 何處可消憂

地際 朝陽滿ち 天邊 宿霧収まる  
風は残雪を兼ねて起り 河は断氷を帯びて流る  
北闕 心極を馳せ 南図 尚お旅遊す  
登臨して 思い已まず 何れの処にか 憂いを消す可き

白梅の老木のかげのくつきりと動かぬ芝にたんぽぼ咲けり

(若山 牧水)

猫にげて梅ゆすりけり 臘月 (池西言水)



雨宮春聲先生書

半紙部規定課題A

3月25日正午必着

雲 移  
根 石  
動

※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

3月25日正午必着

行書

移石動  
雲根

隸書

移石動  
雲根

明石春浦先生書

草書

移石動  
雲根

行草書

移石動  
雲根

しずかなわびずまい、隣り合う家とてなく、草むす徑は、荒れるにまかせた庭へとみちびかれる  
鳥は池の中の木立にやどり、僧がひとり、月の光の下に門をたたく（ひそやかなその音）  
橋を過ぎてなおも存する野のけはい、山中の雲のわく石を移し来てすえてあるのが目に入る  
しばらく他処に行っていました、またここにもどって来ました、風雅のちぎり、決して言に違ふことはありません

題「李疑幽居」

賈島

閑居少鄰並  
草徑入荒園  
鳥宿池中樹  
僧敲月下門  
過橋分野色  
移石動雲根  
暫去還來此  
幽期不負言

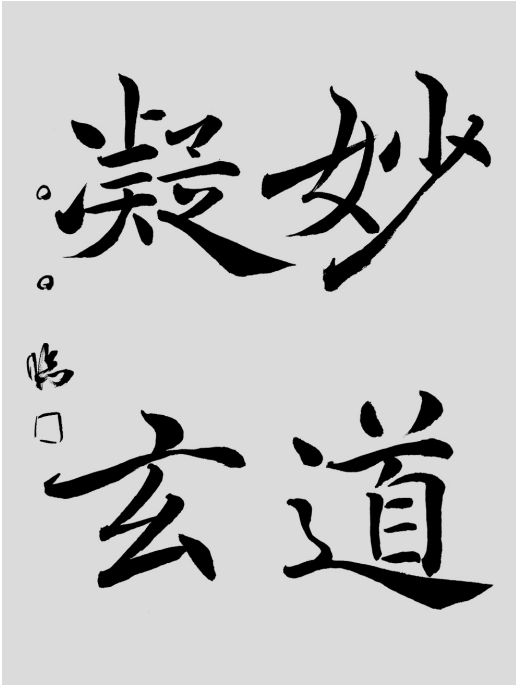
李疑が幽居に題す  
閑居 鄰並少に  
草徑 荒園に入る  
鳥は宿る 池中の樹  
僧は敲く 月下の門  
橋を過ぎて 野色を分かち  
石を移して 雲根を動かす  
暫らく去りて 還た此に来る  
幽期 言に負かず

(出典)  
朝日新聞社刊  
「三体詩」下より

3月25日正午必着



西 墨濤先生臨書



妙道は凝玄にして、

古、若隱若顯、運百

福而長今、妙道凝

玄、遵之莫知其際、

法流湛寂、挹之莫

測其源、故知蠹蠹

(千劫を歴て) 古びず。隠れたるが若く頭わ  
れたるが若く、百福を運らして今に長ず。

妙道は凝玄にして、之に遵うも其の際を

知ること莫く、法流は湛寂にして、之を抱

むも其の源を測ること莫し。故に知る、  
蠹 蠹たる(凡愚)

唐 褚遂良・雁塔聖教序

浙江省の出身で、河南公に封ぜられたことから、褚河南の稱もある。歐陽詢・虞世南と合わせて「初唐の三大家」といわれるが、彼らより四十年程、後輩となる。彼は若い時から書家として、また鑑識家として優秀だったので、重臣の魏徵の推薦により四十一歳の時から太宗に仕えた。

彼は書家として優れていたばかりでなく、人格が非常に高潔・硬骨の人であった。太宗の死後、高宗に仕えたが、則天武后が皇后になろうとするのを反対した為に左遷され、晩年は不遇の中、愛州(今のベトナム)で死んだ。

彼の書は、遠く王羲之を範とし、虞世南・歐陽詢を師としたが、のちに一派を成した。結体は閑雅悠遠、用筆は清勁で変化の妙を極め、韻致に富んでいる。

この雁塔聖教序は、五十八歳の書で、彼の代表的傑作である。玄奘法師の功績に対して太宗・高宗がそれぞれ序文と序記を作ったものである。石質が良く現在もほぼ完全な状態で残っている。結体は彼独自の豊かな抱擁力と広がりを持ち、用筆は弾力性に富み、変化の妙を極めていいる。(春廣)

3月25日正午必着

遵之莫知其際法流湛  
寐挹之莫測其源

之に遵うも其の際を知ること莫く、法流は湛寂にして、之を挹むも其の源を測ること莫し。

△做書参考▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。

出生三十年常遊千萬里行江青草  
合入塞紅塵起鍊藥空求仙讀書兼  
詠史今日歸寒山枕流兼洗耳

出生三十年 常遊千萬里 行江青草合 入塞紅塵起  
鍊藥空求仙 讀書兼詠史 今日歸寒山 枕流兼洗耳  
（寒山）

3月25日正午必着

教育部毛筆



しん  
真

じゅ  
珠

中学一年

雨宮春聲先生書



ゆう  
雄

し  
姿

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



かい  
開

ほう  
放

小学五年

榎戸春龍先生書



はい  
俳

く  
句

小学六年

藤井良泰先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



3月25日正午必着



さ

ゆう

小学三年

藤田幸春先生書



しゅ

やく

小学四年

細谷春誠先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

う ま 小学一年・幼年



森戸春濤書

だ 出 す 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

失敗を取りもどす  
 ように努力する

小学五年

体操の終わりにおも  
 いきり深呼吸をした

小学六年

共に過ぎた思い出が  
 今新しくよみがえる

中学

山々の雪をあらめて谷に  
 あふれて流れくだる水音

一般(級位)

春は梅のほびにかすみつ、  
 曇りも果てぬ春の夜の月

一般(段位)

大空は梅のほびに霞みつつ曇りも果てぬ春の夜の月(藤原定家)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
 また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

を	ひ
	な
か	に
ざ	ん
っ	ぎ
た	よ
	う

幼年

な	五
だ	人
ん	ば
に	や
か	し
ざ	を
る	ひ

小学一年

を	お
た	い
べ	し
る	そ
パ	う
ン	に
ダ	竹

小学二年

ち	電
や	池
を	で
か	動
っ	く
た	お
	も

小学三年

ず	こ
ら	の
し	植
い	物
花	園
が	に
あ	は
る	め

小学四年

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。



さみだれを あつめて早し 最上川 (松尾芭蕉)  
三多禮 徒免亭

岩本景楓先生書